中部大学大学院　国際人間学研究科レポート

2020 Vol.17 GLOCAL

Forum

■現代沖縄の神々と村落祭祀の現状
—宮古島西原の村落祭祀を事例に—　平井芽阿里

■戦後ジャーナリズム史におけるヴェトナム戦争報道
岩間優希

Notes

■放送研究会の番組映像をアーカイブしたい
—未組織化映像のアーカイブおよび利活用手法の研究—
安永知加子

■プロテウス効果に資するアバターおよびVR技術を用いた性格創成
—自己表現の拡張および行動パターンの学習支援を目指して—
佐藤雅也

News & Record

■第13回教員研究会を開催

■第12回「院生の力」を開催

中部大学大学院国際人間学研究科
Chubu University Graduate School of Global Humanics

GLOCAL

GLOCALは、GLOBALとLOCALを組み合わせた造語であり、地球規模でのグローバルと
身近なローカルを、ともに等しく重視する考え方を意味しています。

ごあいさつ

中部大学大学院国際人間学研究科の活動レポート、Glocal Vol.17 をお届けいたします。

本研究科は、1991 年に国際関係学部を基礎に創設された国際関係学研究科国際関係学専攻をルーツとして発足しました。その後、1998 年に創設された人文学部を基礎とする 2 専攻（言語文化専攻、心理学専攻）が 2004 年に合流し、名称も「国際人間学研究科」に変更されました。さらに 2008 年には歴史学・地理学専攻が加わり、４専攻体制となって現在に至っています。

グローバル化という言葉が当たり前のように口にされるようになった現在、私たちは社会のどのような領域で仕事をするにしても、国際的な視野をもって自分の果たすべき役割を考えずにはいられません。たとえば、2015 年 9 月の国際連合サミットで採択された SDGs（持続可能な開発目標）は、国家の枠を越えた人類社会共通の目標として広く共有されています。

ただしここで「国際的な視野」というのは、ただ国外に目を向けるということではなく、同時に国内にも目を向けることを意味しています。新型コロナウイルスの影響で、現在はヒトの流動も一時的に停止状態にありますが、やがてこの状況が打開された暁には、以前にも増して色々な国々の人々が日本にやってきて、共に仕事をしたり日常生活を送ったりするようになることが確実だからです。グローバル化というのは、このように日本社会それ自体が国際的な「場」として開かれていく過程なのであり、その意味で自分が暮らす地域への関心はますます重要になるにちがいありません。本研究科はそうした認識に基づいて、グローバルな視点とローカルな視点の両者を軸とする「グローカル」な教育研究を理念として掲げています。

本誌には、多様な専門分野で幅広く活躍する教員の研究報告 2 編と、それぞれのフィールドで着実に研究を進めている院生 2 名の研究報告 2 編が収められています。いずれも短い文章ながら力のこもった内容であり、まさに本研究科が標榜する「グローカル」な視野に基づいた研究の一端をうかがわせるものであると言えるでしょう。

このように教員と院生が同じ誌面で相互の研究内容を共有する機会はきわめて貴重なものであり、研究科としてもますます本誌の充実を図って参りたいと思います。どうぞ今後ともよろしくご指導･ご鞭撻を賜りますよう、お願い申し上げます。

2020 年 10 月 30 日

石井　洋二郎（中部大学大学院国際人間学研究科長）

Profile
国際人間学研究科　国際関係学専攻　准教授
平井　芽阿里（HIRAI Meari）

立命館大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程修了（文学博士）。専門は文化人類学・民俗学。主なフィールドは日本と沖縄。沖縄の聖地と神々、県外移住者、シャーマニズム、学校のフォークロアについて研究。著作に『宮古の神々と聖なる森』（新典社、2012 年）、共著に『はじまりが見える世界の神話』（創元社、2018 年）などがある。

Forum

現代沖縄の神々と村落祭祀の現状
―宮古島西原の村落祭祀を事例に―

沖縄の聖地―御嶽（うたき）

沖縄には「御嶽（うたき）」という、神々が宿ると信じられている聖地が点在している。御嶽とは王府が与えた聖地の総称であり、地域によってはおがみ山、ムイ（森）、グスク、ウガン、オン、スクなどとも呼ばれる。〔仲松 1983：294〕。1713 年に編纂された『琉球国由来記』には、900 箇所以上もの御嶽が掲載されている〔外間他編著 2011〕。

御嶽は木々が密集し、森のようになっている場所や、鳥居や祠が建ち、世界遺産や観光地になっているところもある。そのため、しばしば神社と混同されることもあるものの、御嶽は、本来は自由に立ち入ることは許されていない。琉球王国時代、御嶽に入ろうとした国の役職者が女装をした話、妊婦は胎児の性別が男である可能性から立入を禁じられた話などは有名である。

パワースポットブームの影響により、2010 年以降、聖域である御嶽を荒らす観光客などが各地で問題となり、宮古島のある御嶽には「許可無く鳥居より先への立入りを禁ずる」という立て看板が掲示されている。御嶽はたとえ地域の者であっても、特に男性には、現在も固く閉ざされた禁域なのである。

神々への祈り―村落祭祀（そんらくさいし）

御嶽が外部に開かれた場所でないのは、村の神々がまつられている空間であり、その神々を各地域ごとの神役や祭祀組織、自治体が村落祭祀を行うことによって、管理し、保持しているからである。村落祭祀とは、村落単位で行う村の神々へ祭祀儀礼のことであり、作物などの豊作や豊穣祈願、収穫祭、農作物の害虫を追い払う農耕儀礼や、悪霊や悪口を村落外に出す厄払い儀礼、大雨や台風などの災害から村を守るための安全祈願、航海安全と豊漁祈願、水の神々に感謝する祈願、村人の安全や健康への祈願などが行われている。

村落祭祀は主に女性が中心的担い手となる。これは、沖縄では、神々の前では、女性の方が男性より地位が高いといったような「女性の呪的・霊的優位性」の考えがあるためである〔比嘉 1987：77〕。

宮古島西原―ナナムイの神役

本稿では、沖縄県宮古島の西原（にしはら）という地域を事例に、御嶽の神々と神役との関わり、そして村落祭祀の現状について、簡単に報告する。

西原で生まれ育ったり嫁いできた女性は、一定年齢に達すると「ナナムイ」という名称の祭祀組織に加入することが義務付けられている。祭祀組織に加入した女性は、ナナムイの神役に就任し、村落祭祀の担い手となる。これまで西原に住む女性たちは、46 歳でナナムイに加入し、56 歳までの 10 年間、子育てや仕事との両立を果たしながら神役という大役を努めてきた。村落祭祀を担うためには、神々や聖地の名称、村落祭祀の行程、供物の配置方法、供える線香の数、神々に歌う神聖な歌である神歌などを体得していく必要があり、それは 10 年かけても学びきれないほどの複雑な内容となっている。

また、西原の村落祭祀は、年間 45 回以上行われており、準備なども含めると、週に 2、3 回、御嶽に通うことになる。さらに、神々の事柄は家族よりも優先されるため、夫が病気で入院していても、子どもが熱を出していても、神役に選ばれた女性は、御嶽に行かなければならない。加えて、神役には死の穢れに関する行動規制もあり、葬儀への参加が憚られるなどする。

村落祭祀の現状―西原の状況

近年、奄美、沖縄、宮古、八重山諸島の各地で、村落祭祀の維持が困難となっている。それは、過疎化や人口の流出、神役になりたがらない女性の増加によって、祭祀組織への加入者が定員に満たない状況が続いているためである。

南西諸島の各地では、村落の神々に関する事柄には「過去（理念的な〈始原〉）から伝えられている状態のままに維持されねばならないとする〈始原遵守理念〉」が働いている〔島村 1993：103〕。神々に関する事を変えることは絶対的な禁忌である。それは、改変に関わった自治組織の成員や神役間、地域で起こる災いやトラブル、病気や怪我、事故や災害、些細な悪い出来事であっても、その全てが「神々への禁忌を破ったためではないか」と解釈されることになるからである〔平井 2012：245-246〕。そのため、南西諸島の各地で、神々への禁忌や伝統を保持しようとするあまり、すでに途絶えてしまった村落祭祀も多い。

2000 年以降、西原でも神役の数が減少し、村落祭祀の維持が困難となっている。西原では、子育てや仕事との両立、本人に加え家族への負担を少しでも軽減するため、神役の任期を 10 年から 3 年に縮小したり、本来は神役の干支に合わせた日取りで行う村落祭祀の日程を全て土日に変更したり、同じ内容の村落祭祀を同一日に実施することで、年間日数を減らす、などの対策をとってきた。結果、2020 年現在でも、かろうじて年間 45 回以上もの村落祭祀を継続している。

しかし、先述したように、本来は、村落の神々に関することは変えてはならないはずである。それでは西原では、どのような方法で神々の禁忌を克服してきたのだろうか。

神々との連携で改変

西原では、現在は主食としていない粟や麦の祈願も、伝統的な手法を守りながら行うなど、村落祭祀の内容や供物、儀礼の手順や神歌の内容など、〈始原遵守理念〉を保持しながら村落祭祀を維持している。

一方で、時代変化に伴い、変えなければならないこと、変わっていくことには、柔軟に対応している。例えば、神役の人数が少なくなったことによる、止むを得ない御嶽で携帯電話の使用や、車での巡拝、祈願中の着物の着用を動きやすい着物風の洋服に変えることなどである。ただし、これらも含め、何か一つ変える度に、それがどのような些細な事柄であっても、神々に「報告するための祈願」を行っている。なぜ変える必要があるのか、どのように変えるのか、全てを神々に丁寧に説明し、報告し、許可を得てから、慎重に変えるのである。

以前は、神々と直接交流することができると信じられている「ムヌス（ユタ）」と呼ばれる民間巫者に、神意を伺うことが一般的であった。しかし、変化を重ねる中で、神役からも神々に語りかけ、判断を仰ごうとする積極的姿勢が見られるようになった。

村落祭祀を維持することは、御嶽を通じた神々との関わりを繋ぐことでもある。

男性神役の役割

ところで、沖縄の村落祭祀や祭祀組織の研究は、女性の霊的優位性から、女性中心に述べられてきた傾向にある。では、男性についてはどうであろうか。西原では、男性は 50 歳になるとナナムイに加入する。7 年間神役として、年間 45 回以上ある村落祭祀のうち、年 6 回のみ参加し、補佐的な役割を果たす。年に 1 度、男性神役を中心とした「ミャークヅツ」という航海安全、五穀豊穣、健康を祈願する豊年祭が 4 日間かけて行われる。ミャークヅツでは、「五穀豊穣旗」などの 5 つの旗を担ぎ、集落が「ユー（世・幸福・幸・豊穣）」で満ちるよう、旗を地面に打ち付ける「地鳴ならし」をしながら、歌い踊り、パレードをする。

また、ミャークヅツでは、「マスムイ」も行われる。マスムイとは、西原の新生児を特定の御嶽の神々に登録する儀礼である。マスムイを行う御嶽には、「帳簿の神」が祀られており、西原出身者は、帳簿の神が持つ帳面に名前が記載されると、神の世界での「戸籍登録」が済んだことになり、一生分の守護が約束されることとなる。

神々との海を越えた繋がり

実は男性神役は減少しておらず、毎年、50 歳になる男性のほとんどがナナムイに加入している。2020 年度、ナナムイに加入する男性は、12 月末に行われる「入学式（加入式）」を控え、宮古島以外に住む家族を総動員すべく、チケットの手配に追われている。

そしてこのような男性のナナムイを支えているのは、県外在住者でもある。愛知県名古屋市には、出稼ぎや集団就職、縁故を機に移住した宮古島の西原出身者が多く在住している。数ヶ月おきに名古屋市内の宮古島料理店で開催される「オジーの会」という名の勉強会では、故郷西原の神役に就任した男性達が、方言での挨拶や踊りの方法、村落祭祀の作法について勉強する。彼らは年に 6 回、仕事を休み、神役として故郷の村落祭祀に参加するのである。父がなぜ頻繁に宮古島に行くのか、理由を知らない名古屋で生まれ育った子ども達もまた、西原の神様の帳面に記載されている。つまり、西原の神々の守護の範囲は、県外で生まれた西原の血を引くものにも広く及んでいるといえる。

以上のように、祭祀組織が安定的な成員を確保することと、安定的に存続することは、必ずしも同義とは言えず〔平井 2017：53〕、現代沖縄の村落祭祀の現状について考察するためには、祭祀組織に所属する神役個々人の実践や、海を越えた神々との関わりについても、着目する必要がある。

図 1.　宮古島西原のミャークヅツ

引用文献

島村恭則1993「民間巫者の神話的世界と村落祭祀体系の改変 ―宮古島狩俣の事例―」『日本民俗学』194 日本民俗学会

仲松弥秀1983「御嶽」沖縄大百科事典観光事務局『沖縄大百科事典　上巻』沖縄タイムス社

平井芽阿里2012『宮古の神々と聖なる森』新典社

平井芽阿里2017「岐路に立たされるコミュニティ―宮古島の祭祀組織の生成と再編成を事例に」秋津元輝他編『せめぎ合う親密と公共：中間圏というアリーナ』京都大学学術出版会

外間守善他編著2011『定本琉球国由来記』角川学芸出版

Profile

国際人間学研究科　国際関係学専攻　准教授

岩間　優希（IWAMA Yuki）

立命館大学先端総合学術研究科修了。博士（学術）。専門は社会学。特に「戦争とジャーナリズム」を中心に研究を行っている。著作に『PANA通信社と戦後日本』（人文書院、2017）、『文献目録 ベトナム戦争と日本』（人間社、2008）、など。オーラルヒストリー調査を数多く行い、「越境による抵抗、あるいは抵抗のための越境―高橋武智氏に聞く―」『アリーナ』（18号別冊、中部大学、2015年）、などに発表。

Forum

戦後ジャーナリズム史における ヴェトナム戦争報道

なぜヴェトナム戦争なのか

戦後日本のジャーナリズムにおいてヴェトナム戦争報道は黄金時代であったとも言われる。ヴェトナムを取材した戦場ジャーナリストの華々しい活躍は現在でも繰り返し想起され、沢田教一や一ノ瀬泰造といったインドシナ取材で命を落としたカメラマンの物語は映画にもなり、ヴェトナム戦争を知らない世代にもある種の憧れを抱かせている。

当時の新聞やテレビを考えてみても、ヴェトナム戦争は長期にわたってトップニュースを飾り続ける国際的事件であった。数多くの特派員が南ヴェトナムを取材し、少なくとも現地での検閲はなかった。このように自由な取材･報道が許された現代の戦争は他にない。

第二次大戦の敗戦からまだ 20 年しかたっていない日本の人々は、日々テレビによって伝えられるリヴィングルーム・ウォーを見ながらかつての自分たちを思い出さずにはいられなかった。空襲に怯えたあの日の自分と北爆下のヴェトナム人を重ね合わせる者もいれば、アジア人を苦しめる米兵に自らを見た者もいた。そしてそのヴェトナムへ戦闘機が飛び立っていたのは在日米軍基地からであったのだ。

ヴェトナム戦争報道が反戦平和意識を高めたのだろうか？それは現在のところ何とも言えない。日本のヴェトナム報道に関する研究は皆無だが、アメリカのヴェトナム報道に関する研究が伝えるところでは、報道が世論を反戦に導いたという明確な証拠はない。むしろ当初からメディアは米政府の対ヴェトナム政策に肯定的で、報道が反戦的に変化していったのは世論を後追いしてのことだった。

日本ではこれとは事情が異なる。1965 年頃から日本のジャーナリストは戦争の被害者に目を向け、戦争の苦しみをニュースの中で取り上げていたし、この戦争に否定的な世論はその頃から目に見えるようになっていた。だが、これは 20 年前に原爆を投下されて戦争に負け、GHQ による占領を経験した国民に共通する感情でもあった。

とはいえ、まずは日本のジャーナリズムがこの戦争をどう伝えたのかを見ていこう。ヴェトナム報道はこれまで振り返られることがほとんどなかった。戦後の日本ジャーナリズムが自由で継続的取材をなしえた唯一の戦争報道であったにもかかわらずである。

ヴェトナム報道の始まり

ヴェトナム戦争は宣戦布告のない戦争だったため、いつを始まりとするかは論者によって違いがある。1954 年にフランスがディエンビエンフーの戦いで敗北しインドシナから撤退した時点ですでに次の戦争が始まっていたのだとする見方もあれば、1960 年に南ヴェトナムで解放民族戦線が結成された年を起点とする見方もある。あるいは、1964 年 8 月のトンキン湾事件、1965 年 3 月の恒常的北爆開始を始まりとする見方もある。

日本のヴェトナム報道の始まりを、筆者は 1964 年末から 1965 年にかけてと考えている。なぜなら、マスコミ各社が南ヴェトナムの首都サイゴンに支局を開設し始めたのがこの時期のことだからである。それ以前はバンコクやシンガポール、香港特派員が何か事件があるごとに臨時でサイゴンに派遣されていた。だが 64 年から 65 年にかけて支局を開設し、現地からの報道に本腰を入れ始めたのである。

ベストセラー３冊

最も早い時期に注目されたヴェトナム戦争もののルポルタージュとして、PANA 通信社契約特派員だった岡村昭彦の『南ヴェトナム戦争従軍記』（岩波書店、1965）、小説家･開高健の『ベトナム戦記』（朝日新聞社、1965 年）、毎日新聞外信部長だった大森実監修『泥と炎のインドシナ』（毎日新聞社、1965）がある。開高のルポは元々『週刊朝日』に連載されたもので、大森らのルポは毎日新聞に連載されたものである。いずれも、戦争が激化し始めた時期に発表されたものであった。これら 3 冊がこの時期の出版業界のベストセラーとなった。

図 1.　岡村昭彦写真展盛況の様子（筆写所蔵）

日本人として

各期の報道の特性を詳しく紹介する紙幅はないが、初期の一つのポイントとして、「日本人としての目でこの戦争を捉えよう」という意識を見出すことができる。岡村昭彦は『従軍記』の中で、「アジアからのニュースのほとんどは、日本人の手に寄らず、もっぱら外国の通信社に依存している現状だ」と述べ、大森も「インドシナの将来を、日本人ジャーナリストの目で、とことんまで見きわめようとした企画は少なかった」ことが取材の動機としてあったと語った。

つまり、こういうことである。「初期」の報道ということは、それ以前には日本の

図２．　解放区入り前日の岡村昭彦（筆写所蔵）

ジャーナリストによるヴェトナム報道はほとんどなかった。戦争に関する情報は AP 通信などの欧米のメディアからアメリカ側の情報ばかりが多く発信されてきたのである。では、日本人の目で見るとはどういうことか。自ずと、その反対側の意見や情報を伝えることに意識が向かっていく。実際に、岡村は西側ジャーナリストには取材が許されていなかった解放区に入り込み解放戦線の本拠地を取材したことでスクープをあげたし、大森も後に北ヴェトナム入国を西側ジャーナリストとしては早い時期に実現し、国際的に注目されたのであった。この「反対側からの目線」が初期報道の確立した主要な価値であったと言える。

戦争と民衆

中期（1967 ～ 1968 年頃）の報道では、「民衆」という存在が一つのキーワードとなる。朝日新聞社の特派員として南ヴェトナムを取材した本多勝一は著名だが、彼はルポ『戦場の村』（朝日新聞社、1968）で次のように述べる。「[これまでの戦争では] 司令官や部隊長の言動、せいぜい兵隊の言動が、常に報道の主役であった。戦争の真の犠牲者たちの言動は黙殺されることが多すぎた」。戦争で犠牲となる民衆がとりわけ注目されるようになったのがこの時期である。『戦場の村』はもともと朝日新聞紙上で「戦争と民衆」というタイトルの連載ルポであった。また同時期に毎日新聞でも「民衆」という言葉を冠したヴェトナム・ルポが連載されている。

これは 1968 年を頂点とする世界的な民衆運動・学生運動の高まりとも決して無関係ではないだろう。

ヴェトナミゼーション

1968 年のテト攻勢で解放戦線・北ヴェトナム側の勢力が一斉蜂起し、米軍・南ヴェトナム側は大打撃を被った。それを機にジョンソン米大統領は次期大統領選への出馬を取りやめ、和平交渉が進展、1973 年の米軍完全撤退へとつながるのである。当時はこれでいったん戦争は終わったとされた。だが実際の戦闘が収まったと考えた者は誰もいない。米軍は撤退し、自らの役割を南ヴェトナム政府軍へと託すことで、この戦争はヴェトナム人同士の戦いとなったのである。これは「ヴェトナム戦争のヴェトナム化（ヴェトナミゼーション）」と呼ばれた。

それまで、ヴェトナム戦争はイデオロギーをめぐる代理戦争の面と、民族独立戦争という２つの面があると考えられ、初期・中期の報道では後者にフォーカスされることが多かった。しかし、ヴェトナム人同士の戦いとなったのであるから、民族独立のための戦争という見方は実際の戦況と合わなくなってきた。この戦争は次第にイデオロギー戦争として捉えられるようになり、後期の報道ではその面が強調されたのである。

と同時に、民族独立として捉えていたかつての特派員たちへの批判も見られるようになる。それが 1973 ～ 1975 年頃までのヴェトナム報道の風景である。

第二次大戦との連続性

様々な点で第二次大戦とヴェトナム戦争とのつながりがある。かつて日本はインドシナを占領していたが、ヴェトナム戦争時には、日本語のできるヴェトナム人が日本人特派員の助手を務めたりするなど、彼らを大いに助けたのである。さらに、敗戦後も日本に帰国しなかった残留日本兵の存在もこれと対を成すものであり、日本人記者が残留日本兵の人脈で解放区への取材を成功させた例も見られた。

戦争観という点では、ヴェトナム戦争を報道によって知るオーディエンスがかつての戦争を想起したと先に述べたが、取材するジャーナリスト自身もそうであった。目の前で繰り広げられる戦争は、まさに幼少期に自らが体験した情景と否応なしに重なってくる。また後期のジャーナリストたちにおいては戦争体験よりもその後の GHQ 占領体験とサイゴンの様子を重ね合わせる視点が見られた。そうした点においても戦争の重層性・連続性を見ることができるのである。

参考文献

松岡完「戦史は書き換えられたか――ベトナム症候群克服の試み」日本国際政治学会編『国際政治』第130号、2002年5月

Daniel C. Hallin, *The "Uncensored War": The Media and Vietnam*, University of California Press, 1989

Profile

国際人間学研究科　言語文化専攻　博士前期課程 1 年

安永　知加子 (YASUNAGA Chikako)

岐阜県土岐市出身。2020 年 3 月に中部大学人文学部コミュニケーション学科を卒業。同年、国際人間学研究科に進学。在学中、同大学のサークルである放送研究会に所属し、番組企画・制作・放送の経験を活かし、映像アーカイブの研究を行っている。

Notes

放送研究会の番組映像をアーカイブしたい
―未組織化映像のアーカイブおよび利活用手法の研究―

はじめに

近年、インターネットの発展に伴い、デジタルアーカイブや機関リポジトリが様々な組織で構築されている。これらは、運営組織ごとに収集対象を定め、一定のメタデータを付与することで利活用することが目的の一つである。実際に東日本大震災においては、震災前と震災後の映像（静止画および動画）やインタビューを「地域の記憶」と位置づけ、デジタルアーカイブとして構築し注目された。本研究は、組織による地域情報の収集・蓄積・利活用を「地域の記憶」アーカイブを構築していく上で重要な持続可能システムの中核であると位置付ける。

本研究の目的は、中部大学の公認クラブである放送研究会が制作する映像と付随する情報の組織化を行うことで、利活用しやすい映像アーカイブをつくることである。具体的には、カット単位で検索可能なメタデータスキーマとシステムの作成および検索手法を考案することを目的とする。

本研究における動画の考え方

本研究では、映像の中でも動画を中心に取り扱う。動画アーカイブを作成するにあたり留意すべき点として、未編集動画と編集済み動画が共存することが挙げられる。近頃はさまざまな組織の中で録画・放送業務を行う部署も存在する。組織の記録として、単に写真や動画を撮るだけでなく、なんらかの編集を経て蓄積されていることも多い。さらに、市民の持つ端末の高性能化が進み、写真のように録画しただけの動画も以前よりも蓄積される機会が増加した。つまり、動画をアーカイブして利活用する場合、編集作業が施されたものと、録画しただけのものが混在していても使いやすいアーカイブを作る必要がある。

本研究では、動画コンテンツを図 1 に示すように考える。

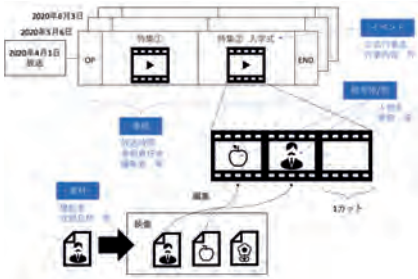


図 1.　本研究における動画の構成図

まず、「番組」は同一の番組名でまとめられる「単一番組」の集合体である。「単一番組」は 1 つ以上の「特集」VTR とオープニング VTR（以下 OP）とエンディング VTR（以下 END）をリニアに接続したものである。「単一番組」を構成する「特集」VTR は、1 つ以上の「イベント」を表現している。VTR は OP か END か特集を単一の「映像」として固定したものであり、しばしば別番組で再利用される単位である。VTR は「映像」から取り出した 1 つ以上の「カット」で構成されており、一定の編集意図の元、繋げられている。「映像」は、アーカイブが持つ全ての「素材」の中から、「単一番組」を作るために選択されたものであり、動画および静止画の区別はしない。

また、各段階に応じて検索のためのアクセスポイント（以下 AP）が変化する。例えば、「素材」では撮影者や撮影対象、日時、イベント名、季節などが AP になる。それに対し、「VTR」は編集者や撮影時期、あるいは季節、イベントや尺などが AP になる。組織内では毎年同じイベントの開催や特集が組まれることが多く、恒例イベントでは過去に何を撮影したのかを下調べとして検索するため「素材」が検索される。その際、AP は撮影対象やイベント名、オープニングや特集映像などのタイプ、撮影時期、季節などが挙げられる。また、何年前のある時期にどのようなものが取り上げられていたのか検索する際は、多くは番組から遡るため、VTR が主な検索対象となる。この場合、AP は、放送日時や放送時期、担当者名などである。

このように映像編集を効率よく行うためには、VTR となる素材の映像を検索しやすい状況に整える必要がある。しかし、番組になる前の、膨大なデータひとつひとつに手作業でメタデータを付与することは、積極的には行われていない。

また、ひとつの組織に所属する情報資源は、その組織内でのみ有用な情報が多い。例えば、大学のような組織では入学年次だけでなく、サークルでの活動期間などがこれに当たる。こ

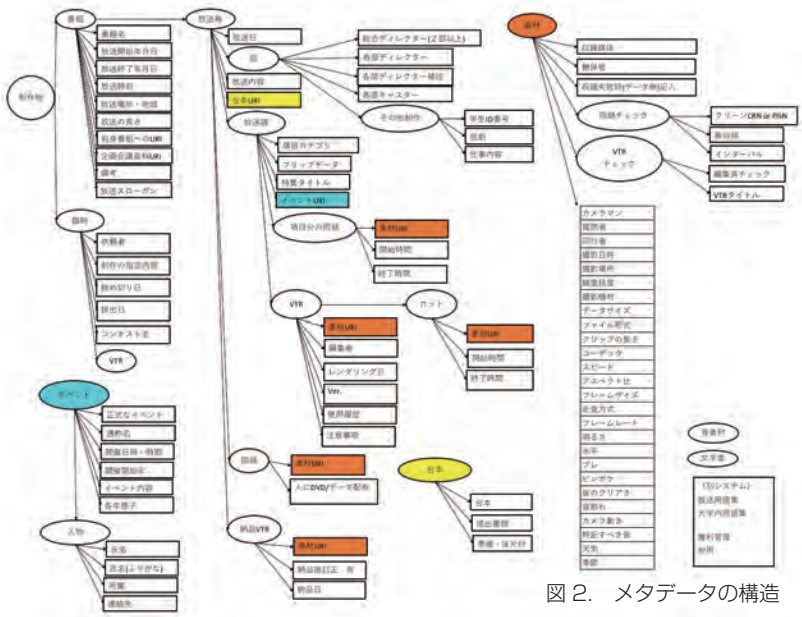


図 2.　メタデータの構造

の情報は、他の組織では必要とされず、汎用的なルールとは合わないことがある。そのため、ガイドラインの設定は、その組織内で行う必要がある。

先行事例

動画のアーカイブは、様々な組織が行っている。しかし、調査した限り、既存の動画配信サイトでは、編集が済んだ動画の形でしか公開していない。例えば、民放は TVer などのサービスを介して、見逃し配信などのサービスを行っているが、これらは基本的に番組としての配信であり、素材単位の配信にはなっていない。規模の大きいテレビ局でもアーカイブは未整備であったり、社外に委託していたりしている。

また、画像の国際的な規格である International Image Interoperability Framework（以下 IIIF）においては、動画の活用に触れられているが、実践的な規格はまだ認められてはいない。IIIF の使用例としては、Nintendo のゲームソフト「あつまれ　どうぶつの森」が挙げられる。世界各地の美術館の所有する画像データが IIIF の形式で公開されていれば、ゲーム内でドット絵として飾ることができる。この機能を使い、多くの人が思いのままに有名絵画を楽しむことができるようになった。いままでは各組織が様々な形式で画像データを持っており、閲覧ビューアーもその形式に沿うように異なるものを使用しなければなかったが、国際基準となる IIIF 形式であれば世界中の多くの人に利用できる。本研究では、IIIF のように、動画に関しても、あらゆる人に利活用できるような規格を作成していきたい。

既存動画アーカイブの問題と解決手法

動画のアーカイブは、前述のように番組単位で行われることがほとんどであり、実際に編集された映像しか残っていない。NHK 内部の制作用アーカイブも、実際に番組制作に使われた数秒以外は廃棄されてきた。また、スタッフの秀作や使用されなかったデータは他業種のコンテンツ制作系でも廃棄されていることが多いそうだ。しかし、このような動画を地域資源として考える場合、番組だけでなく捨てられた部分にも多くの地域情報が残っている。実際に、NHK の番組制作手法を参考に作られた中部大学放送研究会では、1 分のカットのために短いもので約 3 分、長いもので約 1 時間の動画が撮影され、必要なデータ以外は半年程度で廃棄されている。

なお、実際に本研究会で制作された 30 分の番組は約 560 個のカットが組み合わされている。そのため、完成した映像からカット単位で素材を切り出すことは実時間以上の作業コストがかかることがわかる。なお、本研究会では完成した動画はカセットテープに記録されているほか、最近の動画は MP 4 形式で保存されている。

そこで、本研究では映像の編集段階での動的なメタデータ付与を行う。また、各段階に応じたアクセスポイントを設定し、利用者の目的に応じたアーカイブ利用を行うことを支援する。

図 3 のようにメタデータは大きく 4 つのカテゴリに分けた。

「素材」は撮影され、全く編集がされていない動画である。撮影者の情報のみが記録されている。大学の学生組織であるため、学年（熟練度）などが検索の際の AP となっている。

「イベント」は学内の公式行事についてのメタデータである。番組制作者が過去のイベントなどの撮影状況を調べる場合などに使う AP が含まれている。大学を中心とした当該組織内の統制語彙が使われている。

「被写体 / 物」は、映像に映る人物や物体、風景や季節などである。番組制作者および編集者が番組制作時に付与するものであるため、編集によって撮影者の思惑とは異なる対象がメタデータになることがある。特定の人物や物に対して過去の実例を調べて特集に繋げるための AP となる。

「番組」には映像 VTR がいつ使われたのか、番組制作者は誰なのかなどの情報が含まれる。番組制作者が過去の番組の情報を調べる場合に使う。仮想的な「番組」名に個別の番組が日付単位で含まれている。NHK アーカイブスなどの番組名の検索と日付への細分化の形式を参考にした。

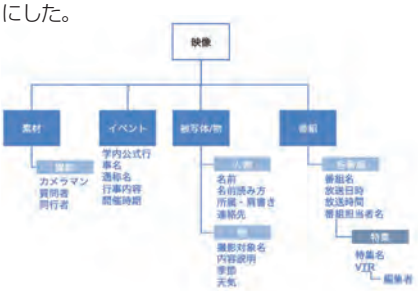


図 3.　メタデータ構造のカテゴリ

おわりに

今後の展開として、動画版 IIIF と呼べるようなシステムの構築を目指し、統一規格の作成や LOD を視野に入れた規格の作成を行っていきたい。

参考文献

宮本聖二（2018）「放送デジタルアーカイブの現状と課題」『デジタルアーカイブ学会誌』2(4)，312-317.

「International Image Interoperability Framework」IIIF-C.<https://iiif.io/>(accessed 2020.9.10)

「あつまれどうぶつの森」Nintendo.<https://www.Nintendo.co.jp/switch/acbaa/>(accessed 2020.9.10)

Profile

国際人間学研究科　言語文化専攻　博士前期課程 1 年

佐藤　雅也 (SATO Masaya)

1997 年、愛知県江南市出身。中部大学人文学部コミュニケーション学科を卒業。同年、国際人間学研究科に進学。卒業研究では「オントロジーを用いた地域情報へのアクセス手法の研究」という題目で、地域特有語彙を標準規格の語彙と同定するためのシステム構築を行った。

Notes

プロテウス効果に資するアバターおよびVR技術を用いた性格創成
―自己表現の拡張および行動パターンの学習支援を目指して―

はじめに

近年ではヴァーチャル・リアリティ（以下VR）技術の発展により容易に VR コンテンツに触れることが可能になった。VR を用いたコンテンツの中には、本来の自分とは異なる外見のアバターになり他ユーザーと様々な交流をするといったものも存在する。その際、自分とは異なる外見に立ち居振る舞いが影響されるという意見が SNS 上に散見された。

もし、VR 空間内での外見が立ち居振る舞いに影響するならば、、VR 空間内で設定される年齢や性別、人種、社会的地位などが自己表現の上での障害の排除に寄与する可能性がある。たとえば、内気な性格なため思ったことを言い出せないといった、内面的特徴によって思うような振る舞いができないという問題の解決に繋がるのではないだろうか。

本研究では、自己表現の拡張および行動パターンの学習支援を目的に、アバターおよび VR 技術を用いた性格創成を目指す。

先行研究

VR 心理学の分野における研究では、ユーザーの動きをアバターに反映させたとき、アバター自体を自身の身体のように認知する「身体所有感の転移現象」が報告されている。また、アバターの視覚的特徴や特性のステレオタイプに基づいて心理的状態・態度に影響を及ぼすことが示唆されている。このような効果はプロテウス効果と呼ばれている（Yee & Bailenson : 2007）。

たとえば、小柳ほか（2020）では、身体所有感の転移によるプロテウス効果として、VR 技術とドラゴンアバターを用いることで（ヒトアバターの場合と比較して）高所に対する態度及び恐怖、落下に対する不安、自身の頑強さに関して、抑制・改善することが可能であることを実証している。

図 1.　ドラゴンアバタとヒトアバタ
出典：小柳ほか 2020, p.5 図 1 より

また、VR を用いた訓練についても研究が進んでいる。医療分野では VR を用いた訓練は従来の訓練と比較した場合、正確性や効率性でまさることが示されている（Blumstein ほか：2020）。

研究方法

本研究では、こうした先行研究を踏まえ、VR 技術とアバターによる外見的「変身」により、アバター利用者の行動がどのように変化すか実験を行い、仮想的な外見であっても行動パターンが変化するのか観察を行う。また、アバターの視覚的特徴や特性のステレオタイプに基づいて心理的状態・態度に影響を及ぼすことが示唆されている（Yee & Bailenson : 2007）ことから、事前にアバターに沿った行動を学習させることによるステレオタイプの強化によってプロテウス効果が強化されるかの実験も行う。さらに、VR 空間内でのオブジェクトとの衝突と現実への感触を同期させることで「ラバーハンド錯覚」を起こし、身体所有感の発生がプロテウス効果に影響を与えるかを実験する予定である。ラバーハンド錯覚とは、本物の手を直接視認できない状態にし、偽物の手と本物の手に同時に刺激を与え続けることによって、偽物の手に対して身体所有感が発生する現象である（Ehrsson & Spence : 2004）。

おわりに

最終的には、VR 空間内で利用者が持つ「外見に対するステレオタイプ的思い込み」を利用して、自己表現の拡張と理想的な行動パターンを獲得するための、プロテウス効果を応用した学習支援ツールの構築を目指す。

参考文献

小柳陽光 ほか（2020）.ドラゴンアバタを用いたプロテウス効果の生起による高所に対する恐怖の抑制.『日本バーチャルリアリティ学会論文誌』25(1), 2-11.

Blumstein G, et al(2020) . Randomized Trial of a Virtual Reality Tool to Teach Surgical Technique for Tibial Shaft Fracture Intramedullary Nailing. Journal of Surgical Education, 77 (4) , 969-977.

Ehrsson, H.Henrik & Charles Spence (2004). That's My Hand! Activity in Premotor Cortex Reflects Feeling of Ownership of a Limb. Science, 305(5685) , 875-877.

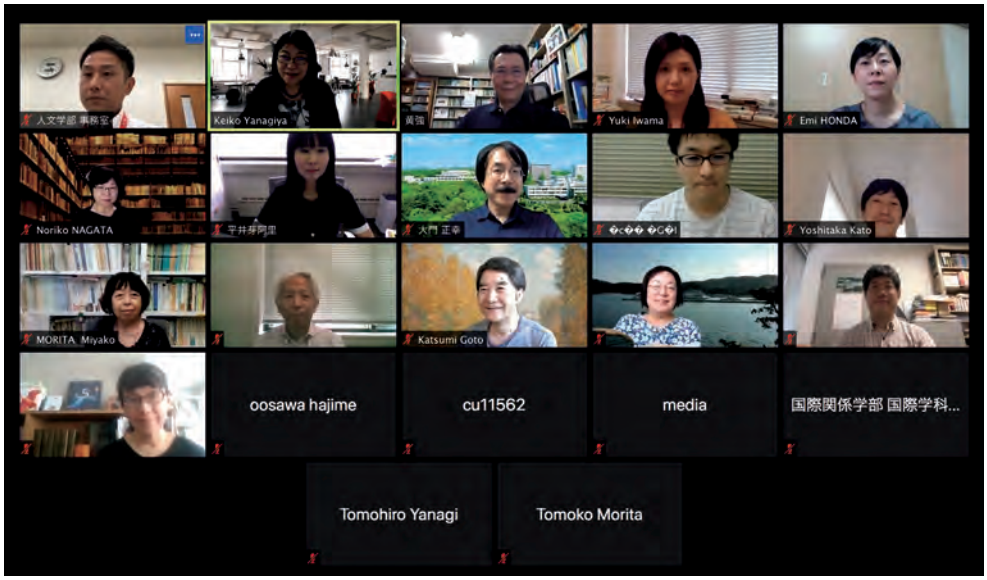
Yee, Nick & Jeremy Bailenson(2007) . The Proteus Effect: The Effect of Transformed Self - Representation on Behavior. Human Communication Research, 33 (3) , 271-290.

News & Record

第13回教員研究会を開催

第13回教員研究会が2020年7月22日に開催された。新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、今回は初めてZoomでのオンライン開催となった。

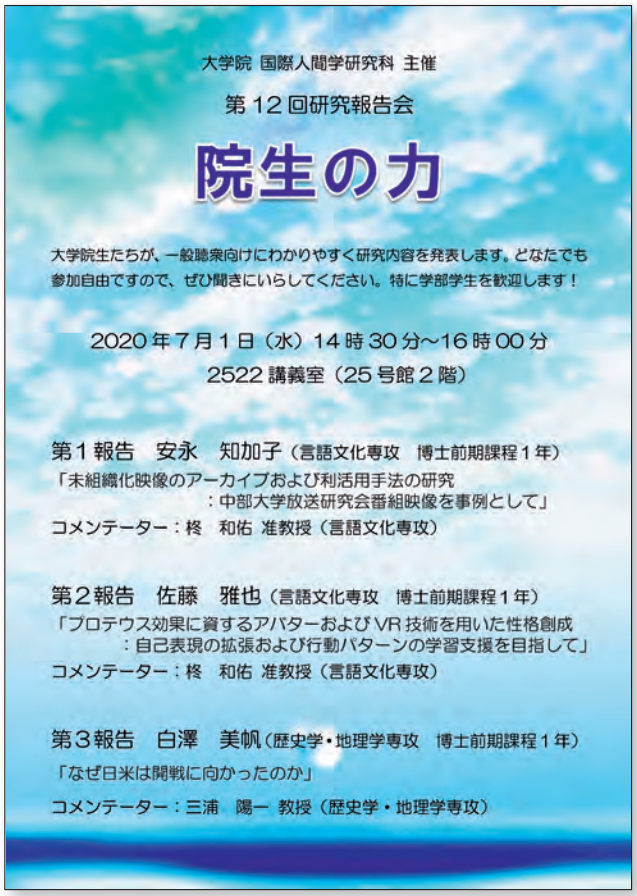
まず国際関係学専攻の平井芽阿里准教授が「現代沖縄の神々と聖地」と題するテーマで、続いて同じく国際関係学専攻の岩間優希准教授が「戦後ジャーナリズム史におけるヴェトナム戦争報道」というテーマで発表した。研究対象も方法も異なる内容であったが、いずれも新進気鋭の若手研究者らしい、問題意識の明確な発表であり、本研究科に新しい風を吹き込んでくれることを大いに期待させてくれるものであった。オンラインで視聴した教員からも活発に質問が出て、充実した研究発表会となった。



第12回「院生の力」を開催

第12回「院生の力」研究報告会が2020年7月1日に開催された。

こちらは対面での開催となったが、例年にも増して参加者は多かった印象で、こうした機会がやはり貴重であることを確認した次第である。今回は2020年4月に博士前期課程に進学した言語文化専攻2名、歴史学・地理学専攻1名の院生が発表をおこなった。内1名は残念ながら退学したので本誌には掲載されていないが、いずれもユニークなテーマに果敢に挑んでいることがうかがえる発表で、これからの研究の進展を大いに期待させる内容であった。質疑応答も活発で、たいへん実り多い報告会となった。



中部大学国際人間学研究科

国際関係学、言語文化、心理学、歴史学・地理学の各専攻からなる国際人間学研究科は、人文系諸科学と社会系諸科学に架橋をかけて、人間と文化、民族と国家の研究のフロンティアを拡大し、グローカルな諸問題に挑戦できる知的創造的研究、および、さまざまな現場から広く社会貢献を目指した実践的研究ができる人間を育成し、研究成果を通して社会に貢献することを教育研究上の目的としています。

国際関係学専攻

科目【博士前期課程】

国際政治経済研究コース

政治経済研究特論/国際法特論/国際政治学特論/国際経済学特論/国際機構論/国際金融論/国際協力論/開発経済学特論/国際公共政策特論/発展途上国論/社会開発特論

国際社会文化研究コース

社会文化研究特論/文化人類学特論/国際社会学特論/国際ジェンダー論/比較文明論/比較環境論/比較社会史論/比較宗教論/地域社会文化研究特論

共通科目

研究方法論/臨地研究論/近代世界表象体系/海外文献研究

特別研究

研究指導

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

国際政治経済学専門研究演習
国際社会文化論専門研究演習
国際比較文明論専門研究演習

言語文化専攻

科目【博士前期課程】

ジャーナリズムコース

研究基礎（情報収集、メディア・クリティシズム）/現代国家・制度特論/現代史特論/情報産業・流通特論/現代社会特論/社会心理学特論/情報技術とメディア特論/ジャーナリズムと倫理特論/現代の広報特論/報道記事作成技法/ドキュメンタリー作成技法/プロジェクト/研究指導

英語圏言語文化コース

応用言語学特論/英語教育法特論/英語学特論/英米文学特論/英語圏言語文化総論/研究指導

日本語日本文化コース

日本語学特論/日本語教育学特論/古典文学特論/近代文学特論/日本文化特論/伝承文芸特論/日本芸能特論/国語教育特論/研究指導

共通

近代世界表象体系

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

メディア・コミュニケーション専門研究
英語圏言語文化専門研究
日本言語文化専門研究

心理学専攻

科目【博士前期課程】

心理学科目群

心理学研究法特論/知覚心理学特論/健康心理学特論

学校心理学科目群

認知心理学特論/社会心理学特論/発達心理学特論/臨床心理学特論/教育心理学特論/学習指導法特論/学校教育特論/障害児心理学特論/生徒指導特論/心理検査法特論/学校カウンセリング特論/教育統計学特論

特別研究

研究指導/課題指導

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

学習心理学専門研究/教育心理学専門研究/認知心理学専門研究/臨床心理学専門研究

歴史学・地理学専攻

科目【博士前期課程】

歴史学コース

日本古代史特論/日本中世史特論/日本近世史特論/日本近代史特論/日本現代史特論/アジア史特論/中国史特論/ヨーロッパ史特論/アメリカ史特論/社会経済史特論/思想史特論/文化史特論/技術史特論/美術史特論/歴史学研究

地理学コース

経済地理学特論/歴史地理学特論/都市地理学特論/地理情報学特論/都市政策学特論/自然地理学特論/地誌学特論/地理学研究

共通科目

近代世界表象体系

特別研究

研究指導

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

歴史学専門研究演習
地理学専門研究演習

●発行：中部大学大学院国際人間学研究科
●編集者：石井洋二郎
●発行日：2020 年 10 月 30 日
●〒487−8501　愛知県春日井市松本町 1200
●中部大学国際人間学研究科（人文学部事務室）
●電話：0568-51-4144（直通）
●ファクス：0568-52-0622
●電子メール：inkn@office.chubu.ac.jp
●国際人間学研究科ホームアドレス：
http://www3.chubu.ac.jp/graduate/global_humanics/